タバコ

あの老人から？　私宛てに…？

市役所生活支援課からのその電話を訝しむ私の脳裡に、老人の孤影が去来した。

電話で初めてその名を知った老人との因縁は、私が教員を定年退職した一年前の昼下がりに遡る。玄関前の花壇に腰を下ろしてタバコを吸っていた私の目に、杖を頼りに足を曳きつつ黙々と歩道を歩む老人の姿が入った。身だしなみという語を辞書に持たぬらしいそのご老体が、昼となく夜となく町内を歩いていることは見知っていた。市役所の支援で近所の古ぼけたアパートに越して来た孤老らしいということも聞き知ってはいた。

その日、老人は歩道から真っ直ぐに私の方へ歩み寄って一言、か細い声で乞うた。

「おとうさん。タバコ…」

間近で見る老人は弊衣蓬髪の見本だった。年の頃は八十ほどか。伸び放題の白髪は台風一過の野原にも似て乱れ、衣服は臭気を漂わせている。私が黙って差し出すタバコを受け取るその手指は垢じみており、黒ずんだ爪は魔女のそれかというほどに伸びている。

「ありがと…」

小さく礼を言って一本のタバコを大事そうにポケットにしまった孤老は歩み去った。

予想されたことながら、老人の物乞いはこの一回にとどまらなかった。以来、散歩の途中に行き会えばタバコを乞われ、公園のベンチで読書の折にも「おとうさん、タバコ」と慕い寄って来た。その都度、私は煩わしさに内心に舌打ちする思いでタバコを恵んだ。手渡す際に、ばい菌の巣にも思えるその指に触れぬよう注意しながら、無言でー。

かと思えば、老人は道で行き会っても、会釈だけで通り過ぎることもあった。遠慮から我慢しているのかと思えば不憫にもなるが、こちらから声をかける義理もない。が、後日また「タバコ…」と乞われた時には、何やら救われた気分にもなるのだった。時に無言でタバコを喜捨し、時に出会いを避ける。ニコチン０・１ミリｇを介するアンビバレントな気分の日々のうちに季節は移ろった。

東北の足早の秋が公園の桜木の葉を錦に染め、次に来る岩手山からの容赦ない烈風がその落ち葉の山をいずこかへ運び去った。雪に埋もれた町に老人の姿を見かけることはなかった。アパートの一室で冬ごもりしているのだろうと思っていた。

その雪もようやくに溶け去り、風に早春の甘味も匂う頃の市役所からの電話だった。孤老は春を待たずに逝き、法令に則って故人の部屋を片付けた市職員が、わずかな身の回り品の中に私の氏名を記した封筒を見出したということだった。

ややあって訪れた職員からその茶封筒を受け取り、玄関先で立ったまま中を改めた。出て来たのは、弱々しい手跡で〈ありがとうございました〉とのみ記された紙片だった。

その紙片に付着している茶色の屑が何かは私にはすぐに知れた。封筒の底を見れば、果たして一本のタバコがあった。ねじ曲がったそれを取り出し、花壇に腰かけて火を点け、くゆらせた。浅春の庭を流れる薄い紫煙に、淡い悔恨が滲んだ。